

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (226)

県内遺跡発掘調査等事業に伴う河口コレクション発掘調査報告書 (8)

高橋貝塚 1

(発掘調査記録写真集)

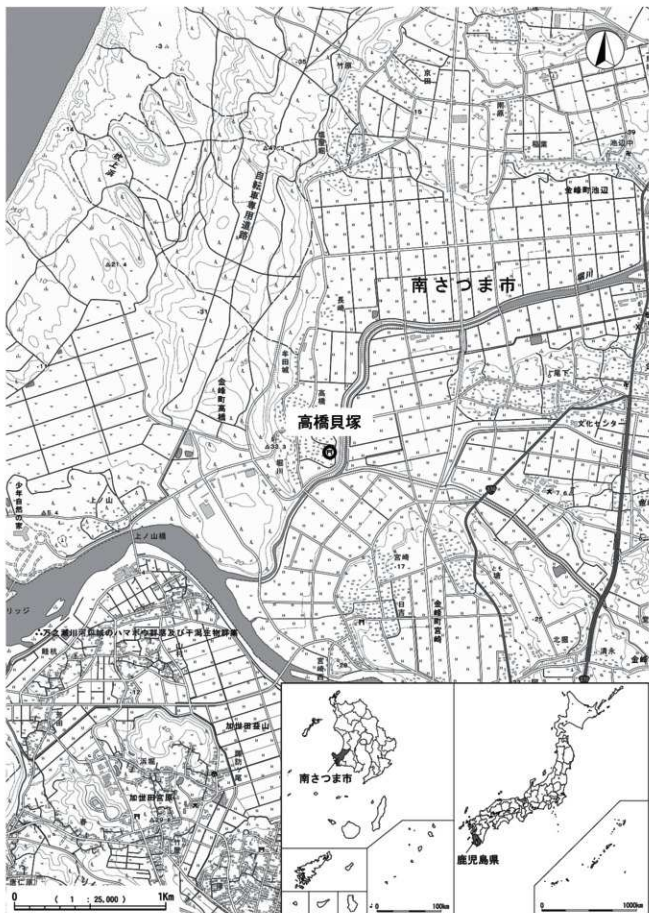
(南さつま市金蜂町高橋)

2024年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

報告書抄録

ふりがな	たかはしかいづかいち							
書名	高橋貝塚1(発掘調査記録写真集)							
副書名	県内遺跡発掘調査等事業に伴う河口コレクション発掘調査報告書(8)							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査書							
シリーズ番号	第226集							
編集者名	堂込秀人							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL 0995-48-5811							
発行年月日	西暦2024年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査 起因
		市町村	遺跡番号					
たかはしかいづかい 高橋貝塚	かごしま けん 鹿児島県 みなみ 南さつま市 し 金峰町高橋	46220	220-213	31° 27' 08"	130° 19' 23"	1962.8.2~ 8.12 1963.8.15~ 8.28	26 95.4 計121.4	学術 調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
高橋貝塚	貝塚	弥生時代前期		貝塚 土坑2基 溝状遺構(住居跡の壁 帯溝の可能性)1基 礎集中1基		・土器類 縄文時代晩期土 器(夜臼式土器)、弥生時 代前期土器(高橋Ⅰ式・Ⅱ 式、板付Ⅰ式・Ⅱ式を中心 とする)、弥生時代中期前 葉土 土製品(紡錘車など) ・石器(石鏃、石包丁、磨 製石斧、柱状方刃石斧、穿 孔具、石錐、石匙、打製石 斧、磨・敲石、石皿、砥 石、軽石製品など) ・骨角器(釣針、骨織、尖 頭器、垂飾品など) ・貝製品(貝輪、貝輪未製 品、貝刃) ・管玉 ・自然遺物 ・鉄 器、鉄滓		弥生時代貝塚、 南九州弥生前期 編年の標識遺 跡、弥生貝交易 の中継地
遺跡の概要	<p>高橋貝塚は、鹿児島県南さつま市金峰町高橋に所在し、万之瀬川の支流堀川の右岸の砂丘内縁の河岸段丘上にある貝塚である。南九州の弥生時代前期を代表する貝塚で、弥生前期の高橋式土器の標式遺跡であり、出土するゴホウラなどから南島と西北九州の弥生貝交易の中継地として注目されてきた。</p> <p>本遺跡は、1949(昭和24)年に発見されていたが、1961(昭和36)年に田布施小学校の辻正徳の情報により、1962(昭和37)年8月に金峰町教育委員会が調査委員会をつくり、河口貞徳らにより発掘調査され、翌年は県教育委員会・金峰町教育委員会の援助を得て河口貞徳らが調査した。調査成果に関する資料や遺物は、河口コレクションとして一括県立埋蔵文化財センターへ寄贈され、本報告を含めて次年度に掛けて、2次にとわたる発掘調査の調査成果をあらためて整理するものであり、本報告書は、発掘調査の様子を当時の記録写真で紹介するものである。</p> <p>今日までの高橋貝塚の評価や、出土遺物等の詳細については、来年度の報告書で詳述したい。</p>							



例言・凡例

- 1 本書は鹿児島県が文化庁の補助を受け、「よみがえる『河口コレクション』の世界事業」と呼称する事業に伴う発掘調査報告書である。
- 2 高橋貝塚は、鹿児島県南さつま市金峰町高橋に所在する。
- 3 報告書作成（整理作業）は、鹿児島県教育委員会が事業主体者となり、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下、本章にわたって「埋文センター」）が担当し実施した。
- 4 本文中での人名敬称は、河口貞徳氏を含め省略する。
- 5 本書は、これまで2回にわたって実施された高橋貝塚の発掘調査の発掘調査記録写真集である。遺物がバンケース1,000箱近くあり、本報告は令和6年度に計画している。河口コレクションとして収蔵・保管されている現場写真等の中から、発掘調査状況が理解できるように掲載する。
- 6 遺物写真は河口コレクションの35mmフィルムとして保管・データ化されている遺物写真のうち、状態のいいものをピックアップした。『九州考古学』18に掲載されたものと一致するもの、他、いくつかの集合写真があるが、投稿用に撮影したと考えられ、掲載された文献については情報を収集中である。
- 7 このため、遺物写真は重複して撮影されたものがある。
- 8 発掘調査での写真撮影は河口貞徳が行ったものである。
- 9 本書の執筆・編集は堂込秀人が行った。

本文目次

抄録	
例言・凡例	
目次	
高橋貝塚の発掘調査記録写真集の刊行に際して	1
第1節 高橋貝塚の位置と発掘調査等の経緯	
第2節 整理業務と記録集の刊行業務体制	
第3節 整理作業の方法と報告書の構成	
第4節 発掘調査の概要	

挿図目次

第1図 高橋貝塚周辺地形図	2
第2図 高橋貝塚発掘調査トレンチ配置図	3

図版目次

図版1 遺跡の現況	5
図版2 発掘調査当時の状況	6
図版3 Bトレンチ貝層, Aトレンチゴホウラ, 土坑1出土土器	7
図版4 AトレンチⅢ区2層甕形土器, Ⅲ区4層磨製石鏃, BトレンチⅠ区3層ゴホウラ・甕形土器	8
図版5 BトレンチⅢ区3層土器 BトレンチⅠ区6層土器	9
図版6 CトレンチⅣ区2層軽石製品, 釣針, 3層鉄器	10
図版7 CトレンチⅣ区3層土器, Ⅵ区4層土器, Ⅳ区4層ゴホウラ貝輪未製品	11
図版8 CトレンチⅣ区5層土器, Ⅵ区6層壺形土器, DトレンチⅣ区2層石包丁	12
図版9 DトレンチⅠ区2層紡錘車, Ⅲ区3層壺形土器, Ⅱ区3層貝輪・土器片	13
図版10 DトレンチⅢ区3層高坏形土器, Ⅱ区3層軽石製品, Eトレンチ1層石剣	14
図版11 FトレンチⅢ区1層遺物出土状況, Ⅲ区2層土器, Ⅰ区2層ゴホウラ	15
図版12 Aトレンチ土坑1, Cトレンチ礫集中	16
図版13 Gトレンチ土坑2, 作業風景:Aトレンチ設定, Bトレンチ設定	17
図版14 Aトレンチ発掘調査状況(1)	18
図版15 Aトレンチ発掘調査状況(2)	19
図版16 Bトレンチ発掘調査状況, Gトレンチ発掘調査状況	20
図版17 E・Hトレンチ発掘調査状況, 発掘調査参加者(1963年)	21
図版18 遺物写真:Dトレンチ彩色壺形土器, Aトレンチ土坑1床面出土土器	22
図版19 石鏃・尖頭器・石槍, 打製石斧・打製刃器	23
図版20 磨製石器 片刃石斧・石包・石鎌, 骨角製品・菅玉	24
図版21 貝輪・鹿角・牙加工品, 剥片石器類	25
図版22 骨角製品・貝輪, 貝輪	26
図版23 骨鏃類	27

高橋貝塚の発掘調査記録写真集の刊行に際して

第1節 高橋貝塚の位置と発掘調査等の経緯

高橋貝塚は、鹿児島県南さつま市金峰町高橋に所在し、万之瀬川の支流である堀川の右岸の砂丘内縁の河岸段丘上にある貝塚である。貝塚は海岸からは2.5kmの高橋集落内の玉手神社の境内にあり、南側に参道・社屋が建てられたために南側は削平されたものと考えられている。標高10~11mに貝塚があり、周辺の水田からは比高差約7mである(第1図)。もともとは楕円形状の丘であったものが、畑地造成により南東・北西が地下げされていると考えられる。

発掘調査により高橋貝塚は南九州の弥生時代前期を代表する貝塚で、弥生前期の高橋式土器の標式遺跡であり、出土するゴホウラなどから南海高良交易の中継地として注目されてきた。

高橋貝塚の発掘調査は、昭和37(1962)年8月に金峰町教育委員会が調査委員会をつくり、河口貞徳らにより発掘調査され、調査期間は8月2日(木)~8月12日(日)とされるが、7月31日(水)には河口らが現地入りしている。8月1日(木)から調査開始の予定であったが、豪雨のため2日からとなった。調査員として河口貞徳、盛岡高孝、諏訪昭千代、出口浩、池水寛治、上村俊雄、辻正徳らと、高橋集落の方を人夫として、玉龍高校生、田布施中生徒を加えて発掘調査を行った。

昭和38(1963)年8月には県教育委員会・金峰町教育委員会の援助を得て河口貞徳らが調査した。調査期間は8月15日(木)~8月27日(火)で、調査員として河口貞徳、盛岡高孝、諏訪昭千代、出口浩、池水寛治、上村俊雄、河野治雄、辻正徳らと、玉龍高校生、吹上高校生、出水高校生らが参加した。その成果は1次調査が1963年に早速「九州考古学」に発表される(河口1963)。出土土器については、1964年に全国の弥生式土器を集めた全国編年を示した「弥生式土器集成 本編1」に南九州地域の第1様式として前期の土器として報告される(河口1964)。1次調査と2次調査と併せて、1965年には「考古学集刊」で発表され、高橋1式土器~高橋4式土器が認定され、高橋1式が報告1式に高橋2式は報告2式に比定し、高橋3式は中期、高橋4式は「弥生式土器集成 本編1」の南九州III様式に該当するとした(河口1965)。南九州地域の前期からの稲作の開始と鉄器の使用が注目された。

故河口貞徳が発掘調査した出土品・記録類等は、埋文センターに平成24(2012)年河口コレクションとして一括埋文センターへ寄贈され、県教育委員会・埋文センターで年次的に遺跡ごとの整理を行い、「山ノ口遺跡」・「出水貝塚」・「上加世田遺跡」などの発掘調査報告書と

して刊行してきた。高橋貝塚の調査成果に関する資料や遺物は本報告を含めて次年度に掛けて、2次にわたる発掘調査の調査成果をあらためて整理するものであり、本報告書は発掘調査の様子を当時のま記録写真で紹介するものである。

第2節 整理業務と記録集の刊行業務体制

発掘調査記録写真集作成に関する業務体制は、以下のとおりである。

〈令和5年度 業務体制(整理作業)〉

事業主体	鹿児島県
調査主体	鹿児島教育委員会
調査総括	鹿児島県立無蔵文化財センター
	所長 中村 和美
調査企画	総務課長 荒瀬 勝己
	調査課長 黒川 忠広
	第一調査係長 平 美典
調査担当	文化財主事 堂込 秀人
事務担当	総務係長 白坂 由香
	主査 斜木 吉夫

なお、本報告書の刊行にあたり、掲載内容の妥当性等について下記の委員会を開催し、検討を行った。

報告書作成指導委員会 令和5年11月30日。

(持ち回り) 黒川調査課長他6名

報告書作成検討委員会 令和5年11月30日
中村所長ほか6名

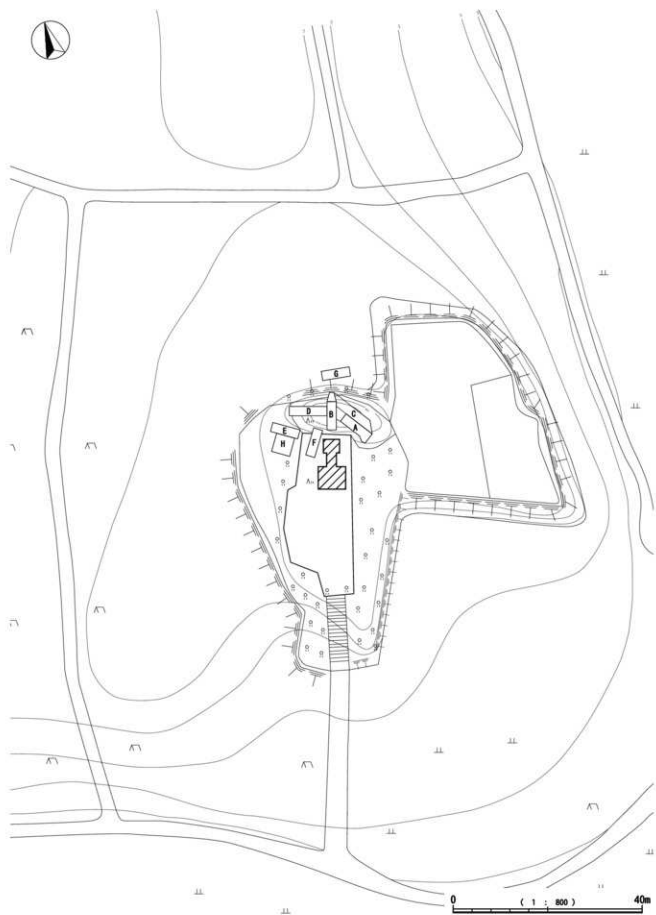
第3節 整理作業の方法と報告書の構成

高橋貝塚の再整理の報告書刊行は令和6年度を予定し、対象となる高橋貝塚の資料は、河口貞徳宅の収蔵庫に保管してあった状態を基本として受け入れ、水洗い等を少しずつ進めながら今日に至っている。

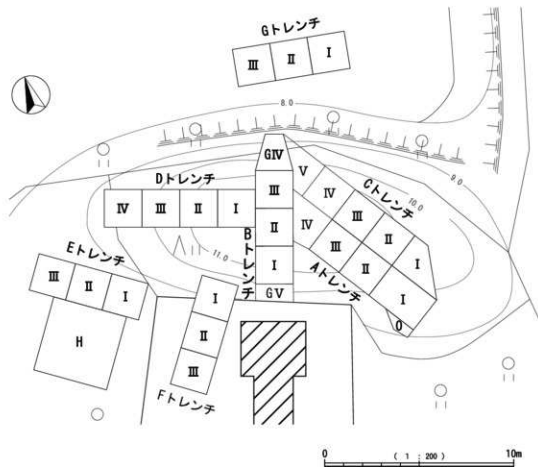
高橋貝塚の出土品は、令和5年11月現在で、平パンケース換算で約960箱存在し、令和6年度の報告書作成のため本年度中に整理作業を進め、従来の報告書の掲載数等考慮すると、本年度中に少しでも刊行できるものがあれば刊行し、その分の頁数を来年度掲載用に確保する必要があるが、写真資料についてはすでにデータ化されていることから、発掘調査記録写真集として先に刊行することとした。

再整理作業にあたり、まず出土品の種類ごと、つまり土器類・石類・貝類・獣(魚)骨類等に分類した。さらに土器、石器・石製品、獣骨・骨角器、貝・貝製品を各トレンチごとに分別している段階である。

記録写真集については、高橋貝塚の発掘調査の概要を



第1図 高橋貝塚周辺地形図



第2図 高橋貝塚 トレンチ配置図

述べた後に、現況写真、遺物出土状況、検出遺構、発掘調査状況、遺物写真の順で掲載することとする。

今日までの高橋貝塚の評価や、出土遺物等の詳細については、来年度の報告書で詳述したい。

第4節 発掘調査の概要

(1 次調査)

昭和37(1962)年8月2日(木)～8月12日(日)

神社裏の貝塚はマウンド状となっており、その最高所から東南側にAトレンチを2×7mで設定し、最高所部分にマウンドを南北に縦断する位置にBトレンチを2×6mで設定した。Aトレンチは東側2×3mをI区とし、西側に2×2mでII区、III区とした。Bトレンチは南から2×2mでI区～III区とした。Aトレンチの西側III区には貝層があり、貝層の東側の広がりか確認された。またI区からはピット(今回の報告では土坑1としたい)が検出され、次年度の発掘調査時に完掘されている。Bトレンチは表土層の下に50cm前後の純貝層があり、本来の2層であった褐色土層がなくなったものと考えられる。貝層下は本来の堆積と考えられる。貝層下は層立が7層に細分されているが、後にDトレンチの発

掘調査を経て、さらに河口の再検討でV層にまとめられている(河口1988)が、層位の比較については今からの整理で検討していきたいと考えている。Aトレンチの層位は、当時の土層断面実測図からはI区・II区の2層は攪乱層とされているが、貝層の上に乗っており、2次調査の2層に相当するであろうし、貝層の上の成層の可能性が強い。3層は貝層と同時期あるいは下層にあたる可能性もある。このように2次調査を含めて、特にAトレンチからDトレンチでは、層位的関係を検証する必要がある。

(2 次調査)

昭和38(1963)年8月15日(木)～8月27日(火)

Aトレンチの北側にCトレンチを2×10m足らずでI区～V区まで設定し、Bトレンチの西側に直角にDトレンチを2×8mでI区～IV区設定した。貝塚の南側の神社のある台地上に、神社の西側に東西方向にEトレンチを2×6m、南北方向にFトレンチを2×6m、北側の一段落ちた平坦地にGトレンチを東西方向に2×6m、それぞれ設定した。

Cトレンチでは、IV区では貝層が一部観られるが、東側ではみられない。Cトレンチでは円隕の集積が検出さ

れた。純貝層の範囲は Dトレンチ個 I・II区まで、III区は擾乱していたが、途中まで伸びていた。Dトレンチ純貝層で厚いところで60 cmを測る。Eトレンチの南側と西側に遺構と考えられる落ち込みがあり、このため南側に4×4mでHトレンチを設定した。Eトレンチの西側では円形状の溝状遺構とその中に硬化面、炉跡が検出され、溝状遺構を壁帯溝として住居跡の可能性が高い。Gトレンチに土坑2を検出した。

出土遺物は鹿児島市立玉龍高等学校に選ばれ河口と考古学部の生徒で整理作業が行われたものと判断される。いろんな制約のもとで進められたであろうが、センターに搬入されたもの時には、遺物の半数は水洗がなされていない状態であった。

〈参考文献〉

- 河口貞徳 1963 「鹿児島県高橋貝塚発掘概報」『九州考古学』18 九州考古学会 1-9 頁
- 河口貞徳 1964 「南九州地方」『弥生式土器集成 本編1』小林行雄 杉原莊介編 日本考古学協会 25-29 頁
- 河口貞徳 1965 「鹿児島県高橋貝塚」『考古学集刊』第3巻第2号 東京考古学会 73-109 頁
- 河口貞徳 1988 「縄文から弥也への軟着陸の高橋貝塚」『鹿児島考古』第34号 鹿児島県考古学会 43-59 頁

图 版



高橋貝塚—神社裏が貝塚部分



高橋貝塚のある丘が右側、左側は吹上砂丘



発掘調査当時の社殿



背後の削平地



B トレンチ貝層



《遺物出土状況》

A トレンチ-貝層の
上にゴホウラ



A トレンチ土坑
出土土製品



A トレンチⅢ区2層
貝層出土甕形土器



A トレンチⅢ区4層
朝鮮式磨製石鏃



B トレンチⅠ区3層
ゴホウラ (背面加工)
と甕形土器



BトレンチⅢ区3層
如意口縁に刻み



BトレンチⅠ区6層
(最下層) 突帯文土器
(夜白式)、特徴的な
台付鉢



BトレンチⅠ区6層
(最下層) 突帯文
土器(夜白式)、指頭
圧痕



CトレンチIV区2層
軽石製品



CトレンチIV区2層
釣針出土状況



CトレンチVII区3層
鉄器出土状況



CトレンチIV区3層
土器出土状況



CトレンチVI区4層
土器出土状況



CトレンチIV区4層
ゴホウラ貝輪待未製品
(腹面)



CトレンチVI区5層
土器出土状況



CトレンチVI区6層
壺形土器



DトレンチIV区2層出土
石包丁



DトレンチⅠ区2層
紡錘車出土状況



DトレンチⅢ区3層
壺形土器



DトレンチⅡ区3層
貝層下に、貝輪
(オオッタノハ)



D トレンチⅢ区 3層
高环形土器出土状況



D トレンチⅡ区 3層
軽石製出土状況



E トレンチⅠ層
石剣



FトレンチⅢ区1層
遺物出土状況



FトレンチⅢ区2層
土器出土状況



FトレンチⅠ区2層
ゴホウラ製品



《遺構検出状況》

A トレンチ土坑
右側は社殿



A トレンチ土坑



C トレンチ礫集中



G トレンチ土坑



《作業状況》

A トレンチ設定



B トレンチ設定



A トレンチ発掘調査状況 (1)



A トレンチ発掘調査状況 (2)



Bトレンチ発掘状況



BトレンチVI層発掘
調査状況



Gトレンチ発掘
調査状況



E・Hトレンチ発掘調査風景



発掘調査参加者

前列 左から 河口貞徳、諏訪昭千代、池水寛治、盛園尚孝
 後列 左から 2 番目 上村俊雄、他 地元有志と高校生たち



D トレンチⅡ区3層出土 彩色壺形土器 (『考古学集刊』 第23図)



A トレンチ土坑Ⅰ床面出土土製品 (『九州考古学』 18 8頁第13図)



石鏃 1～4・石槍 8・尖頭器 5・6・7 (『九州考古学』18 7項 第9図 石器(一))



打製石斧 1～3・6, 打製刃器 4 (『九州考古学』18 7頁 第10図 石器(二))



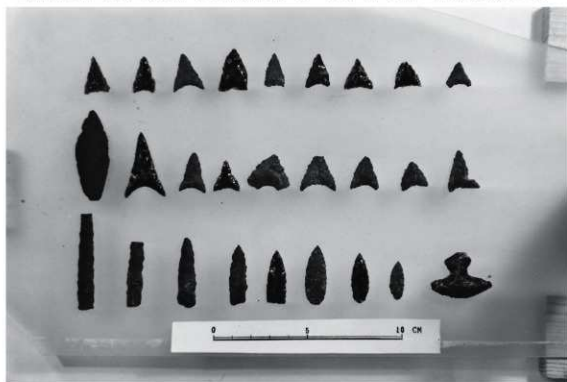
磨製石器 片刃石斧4～8，方柱状片刃石斧4・7・9，石庖丁1・2，石鎌3
 (『九州考古学』18 8頁 第11図 石器(三))



骨角貝製品，菅玉類 (『九州考古学』18 9頁 第14図 骨角貝製品(一))



貝輪未製品, 鹿角, 牙製品 (『九州考古学』18 9頁 第15図 骨角貝製品(二))



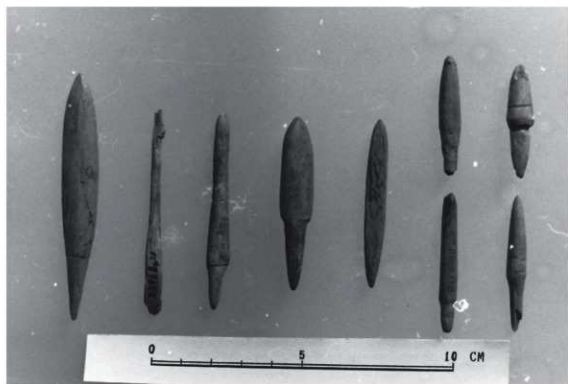
石器集合写真 (『考古学集刊』 第3巻第2号 第18図の剥片石器だけを抽出か)



骨角製品，貝輪



貝輪



骨鏃類

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (226)

高橋貝塚 1

県内遺跡発掘調査等事業に伴う河ロコレクション発掘調査報告書(8)

発行年月 令和6年3月

編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318
鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号
TEL 0995-45-4880 FAX 0995-45-6979

印刷 日進印刷株式会社
〒891-0846 鹿児島市加治屋町16番20号
TEL 099-222-8291 FAX 099-223-2715



鹿児島県